

米欧回覧

第29号
発行
米欧回覧の会
編集
メディア部会

十二月の全体例会

H・ビックスの「昭和天皇」について

ジョージ・秋田氏、熱弁をふるう!

二〇〇二年最後の全体例会は、十二月七日(土)午後から行われ、泉三郎氏や各幹事より会務報告があり、午後二時から、ジョージ・秋田氏の講演と質疑応答が行われ盛会だった。

ジョージ・秋田氏は、H・ビックスの大作「昭和天皇」を組上りたか「戦争責任論は論証されたか」について約一時間にわたる熱弁をふるった。なお、午後五時から別会場で懇親パーティーが行われたが、この席にも、三十名近くが参加し、酒の勢いも手伝ってホンネ続出のデパートの観を呈し、本会ならではの充実した時間となった。(詳細は二・三頁)

イタリアツアー

岩倉使節の足跡を追う

十月五日、泉三郎氏をリーダーとし、会員夫妻ら十二名はミュンヘンに飛び、六日、列車でアルプスの峠を越えてフィレンツェに泊、ローマ二泊、ナポリ一泊、ヴェネチア二泊の

感慨深い歴史旅を無事終えて、十四日帰国した。(詳細は四頁) 各部会に

積極的に参加下さい!

本会には、全体例会の他に各部会があります。部会にはいると自然親しくなり交流も密になります。ですから、なるべく部会にも参加下さることを奨めます。

部会に参加するには別に登録する必要も特別な会費もありません。各部会はその都度の会費で賄っており、登録しておけば案内がきますが、登録していない会員にも常に開かれています。

「実記を読む会」は毎月のように催され、「歴史部会」や「現未来部会」は二、三ヶ月に一回開かれています。「国際交流部会」は現在「懇親」や「旅」も担当しており、それらを独立させた方がいいという考えもあります。「メディア部会」もいろいろの可能性をもった部会

で、やり方次第でいろいろのことが出来ます。どうか関心のある方は積極的に部会に参加して下さい。

二〇〇三年は

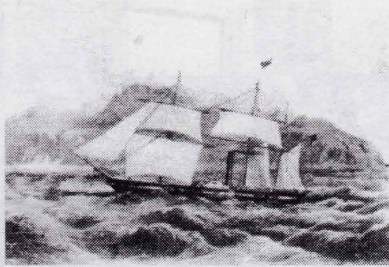
「アメリカ」テーマで:

先の幹事会で二〇〇三年は、ペリー来航からちょうど一五〇年になるので「アメリカ」をテーマにすることに決まりました。そこで、新春の全体例会は、その第一弾として、日米協会の会長で元駐米大使の大河原良雄氏やアメリカ大使館からのゲストを迎え、賑々しく開催することになりました。

楽しい会になると思いますが、友人知人もお誘い下さい。

(詳細は八頁)

五月の国内歴史ツアーも秋に予定の海外ツアーもアメリカがテーマになります。(詳細は六頁)



ミシシッピー号 (ペリーの旗艦) (「幕末明治古写真帖」より)

ベルリンの壁崩壊を機に、東欧社会とロシアが西欧の市場経済に流れこみヨーロッパに大変動が起きたことは記憶に新しい。当時、欧州に旅した私は犯罪の増加に困惑する声を聞いたが、より大きく根本的に低賃金労働の大津波こそが問題だった。

いま、太平洋沿岸地域とくに日本列島でそれに似た大変動が起きている。その重大な契機はむろん巨大

中国の市場経済参入であり、その先鋭的な事例が諸犯罪の急増となり

より大きく根源的には低賃金労働の大津波となっている

十二億という人口規模からいってもそのスケールと影響力の大きさは欧州を超えるま

覚悟せねばなるまい。例えば犯罪の急増がある。中国の窃盗団が

潜入し、ピッキング、カムまわり、サムターンなど新技術を

次々に開発して、日本の住宅やマンションから金品を掠め

盗る。強盗団はブルドーザーやトラックを動員して事務所

や貴金属店を襲い、金庫まるごと店の在庫そっくり強奪す

る。その手口の周到にして大胆なことは日本人の発想を超えている。

そして、日本の十分の一と

「米欧」と「亜亜」 巨大中国からの大津波

泉 三郎

も二十分の一ともいわれる低賃金労働が、各地の大工場や町工場を猛烈な勢いで吸引し中国に持ち去っていく。それはユニクロ現象にみられるような超低価格商品の大量流通となり、日本列島を空洞化し日本人の雇用を奪っていく。ジェット機やインターネットなど交通通信機関の発達が東シナ海の壁を無力化させる。それはかつての大航海時代や産業革命時代の

大移民現象や大々的な植民地生産を連想させる。奴隷や移民、植民地での低賃金労働が、

それまで高価な貴重品だった綿布や茶や諸々の商品を大量安価に供給したのだ。いま、日本

を襲っているデフレ現象の背景には、この大中国の歴大な低価格労働力があることを銘

記しなくてはならない。「米欧回覧」の会は、「米欧」

にしか関心がないのですか? という人がある。むしろ、そうではない。その証拠に本機関

紙の名称は当初より「米欧回覧」となった。 「亜」は

亜細亜、亜羅武、亜弗利加を意味する。いまこそわれわれは、

「亜亜回覧」にも注力して、「実記」にあるように「世界の

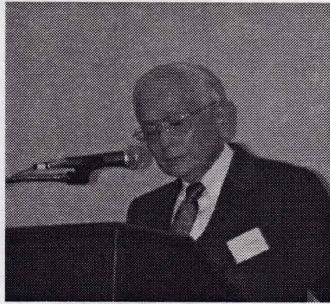
真形を瞭知し、実に深察する」必要がある。

全体例会

ジョージ・秋田氏を招いて
熱のこもった講演と活発な論議

二〇〇二年十二月七日、十二時五十分より、日本プレスセンター十階ホールにおいて、米欧回覧の会の第二十六回例会が開催された。参加者は七十三名。

まず、足立光正会員の苦心の労作であるビデオ「記録・岩倉使節団派遣百三十周年記念国際シンポジウム「岩倉使節団の再発見とその今日的意義」」を上映、一年前の感動を新たに。ついで各部会からの会務報告の後、ハワイ大学名誉教授、ジョージ・秋田氏による「H・ビックスの昭和天皇有罪論は論証されたか」と題する記念講演が行われた。ジョージ・秋田氏は一九二六年ハワイ生まれ、ハワイ大学卒業後ハーバード大学でライシャワー教授の指



導により博士号を取得、ハワイ大学教授を経て現在は同大学の名誉教授である。専門は近代日本政治史、著書に「明治立憲制と伊藤博文」(東京大学出版会・一九七二)、「大日本・アメリカの脅威と挑戦」(日本評論社・一九九三)などがある。

講演は、最近日本でも翻訳出版されて評判となつていいるハーバード・ビックスの『昭和天皇』(講談社二〇〇二)、原題「HIROHITO AND THE MAKING OF MODERN JAPAN」を取り上げ、その方法に関する徹底的な批判を行ったものとなつた。以下、氏の講演の概略をご紹介します。

ジョージ・秋田氏講演

二〇〇一年度のピューリッツァー賞を受けたH・ビックスのこの大著は、一部の評者、あるいはジャーナリズムから、きわめて高い評価を受けているようである。一橋大学の中村政則氏は、「この著作はビックスの歴史家としての力量を十分に示したものである」と言い、J・スミスは「ビックスが天皇神話を完全に砕いた」と述べ、



会場(日本プレスセンターホール)

また「エコノミスト」誌は、「これは歴史的爆弾である」と持ち上げていいる。

では、ビックスの主張は、どんなところにあるだろうか。彼はまず、昭和天皇が、これまでの大方の評価とはことなり、昭和前期における政治・軍事の面に対し完全に権力を持つていたし、またほとんど常に大きな権限をふるつたと言ふ。また大元帥としてあらゆる作戦、たとえば「三光作戦」と呼ばれるようなものについても十分に知悉していたし、承認もしていたのではないかと思ふ。戦争を必要以上に長引かせたのも昭和天皇の責任であると考ええる。戦後はSCAPとの共同謀議によつて天皇制の温存に努め、戦争責任を免れようとした。しかし、昭和天皇はやはり戦争裁判にかけられるべきであつたし、裁判にからなかつたとして、も道義的責任は免れないと思

会員による会務報告



国際ム上する
のビデオを
の映し、足
苦心のシンの
作のシンポ
心のビデオ
の映し、足



会部会
の報告を
の報告を
の報告を



さもを報
の「実」を
の「実」を
の「実」を

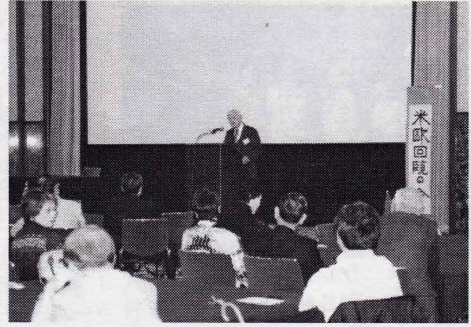
う・・・これがビックスの主張のキイノートであり、彼はその主張を膨大な資料によつて証明したと考えていいる。

しかし、彼の主張はほんとうに実証されているだろうか。また彼や一部の評者の言うように、彼が引用した証言類は、ほんとうに新しい論点を付け加えることに成功しているだろうか。そうではない。これが私(秋田氏)の論証したいところである。

まず膨大な引用証言であるが、とくに新しいと思われるものは、全くないように思われる。もちろん、そうした証言・証拠と言われるものが仮に新しくないとしても、それをフェアに扱いつつ論理的に構築することによつて、新しい視点を見いだすことは可能である。

「歴史」を論述するといふのは、そういうことである。しかし、ビックスが、そのような態

度で資料を扱つたとは、どうしても思えない。天皇ご自身に関する資料は、そもそも自身に關する資料にも少ない。そこで、天皇の心の中、判断のよつて来るところを論じるにはどうしても推論によるところが多くなる傾向があるが、ビックスはとくに恣意的な想像によつたところが多すぎる。彼の論述には「判断しがたい」「証明できない」といいつつ、しかし、「という印象が与えられる」とか、「ということではないか」とか、あいまいな判断を積み重ねて行くことによつて、無理にある結論に到達しようとしている部分が非常に多い。天皇が印璽を押した文書はすべて天皇の意志の表現であるようにビックスは言うが、制度的に言つてもそんなことはありえない。そもそも天皇に関する資料は、非常に多義的なものであつて、複雑な判断を要する。



「歴史」の解釈はすべて個人的なものであることはすでに述べたが、しかしその場合、先入観による資料操作は禁物である。ビックスの記述を読むと、あたかも彼は昭和天皇の頭脳や心を視く超能力を持っているのではないかと感じてしまう。

ビックスの先入観の一つに天皇制即ファシズムであったという思い込みがある。それを証明するためにビックスはあらゆる手段を使っているように、たとえば皇太子時代に行った訪欧旅行の際、すでにイタリアのファシズムへの共感を持ったのではないかとの推定をしてさえいるが、これなどは最も事実と遠い判断である。天皇の統帥権ということにしても、そもそも国家元首は、

ほぼ押しなべて軍の統帥権は持っているもので、日本の天皇制に独自のことはなかった。大演習を統監すると言っても、むしろ天覧と言う方が現実的なほどで、また軍事情報を知悉していたとしても、それがすなわち指揮していたということにはならないのである。

要するにビックスの方法は常に暗示を重ねることによって読者の心理をビックスが定めた方向に向け、結論を誘導しようというもので、これは歴史家としてアンフェアな方法である。繰り返すが天皇制というのははきわめて複雑なシステムであり、白黒をはっきりさせられない部分があまりにも多い。私自身には天皇制をどう思うか、昭和天皇をどう思うかと問われたら、今のところ分からないと答えるしかない。また将来にわたっても、なお容易に結論を導けない要素があると言わざるを得ない。

ビックスの作品を結論的に評価するならば、これはあらかじめストーリーが作られている物語、フィクションであると言いたい。ただ、これはアメリカの中に一九四五年以来絶えず続いている天皇責任論、天皇有罪論の流れに基づいたものであり、そうした意識の流れが未だに海外にあるということを知っている日本人は知っておくべきであらう。

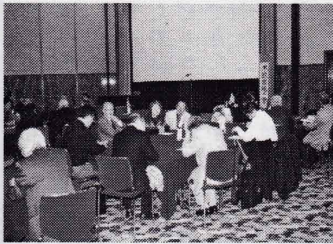


司会の水澤会員
(左はJ・秋田氏)

ブンブン・ミーティング

秋田氏の講演のあと、例によって会員の「ブンブン・ミーティング」が行われ、意見や感想の発表、質疑応答などが活発に行われた。そのなかで、たとえば、

- ・なぜ日本人は率直な天皇制論議を書けないのか
- ・昭和天皇はやはり少なくともある時期で退位されることにより、責任を取られるべきではなかったか
- ・ビックスの論は一九四五年以降のアメリカの世論だけでなく、戦前からの世論とも深く関係しているのではないか



テーブルごとに討議する
ブンブン・ミーティング

ジョージ・秋田氏からのメッセージ

なお、ジョージ・秋田氏からは会の翌日、早速以下のようなお礼と感想のファックスが泉代表のもとに届いたのをご紹介します。

Mr Saburo Izumi,
Thank you for giving me the opportunity to speak to your organization. I was truly impressed by the members: intelligent, well-informed, articulate, fair and courteous in their exchanges with each other. Please tell them!

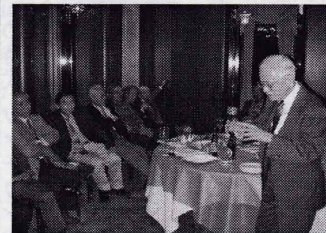
I have long been interested in a subject (over 30 years) and finally in 2000 gave a talk 『西洋諸国が見た日本経済大国への道』. The contents probably answer some of the questions raised by your membership last night.

If you wish I would be pleased to present it to your membership sometime in the future.

Thank you again.

8 Dec 2002 George Akita

戦後の昭和天皇の言動にも大きな問題があるのではないか
・アメリカでビックスの著作に対する批判はあるのだろうか
・天皇は、例えばヒトラーのような「独裁者」ではなかったし、なろうとしたこともなく、またなり得る制度でもなかった。それを「独裁者」と証拠づけるのはいかにも無理だし、不可能だと思ふ
・などといった、真摯な発言が行われた。
懇親会(二次会)
例会后、日比谷聘珍楼で秋田氏を囲んで行われた懇親会で



懇親会でも熱く語る
ジョージ・秋田氏

も、例会の熱気がそのまま持ち込まれ、最後まで熱心・率直で多角的な討議が続いたのは、いかにも当会にふさわしいことであった。(文・水澤会員)
(写真・岩崎会員)

イタリア紀行雑感

麗澤大学名誉教授

鈴木幸夫(会員)

(10月5日
~14日)

二〇〇二年「西洋文明の源流・イタリアを往く」

峠を越えてイタリアへ

アルプス越えには、ナポレオンやハンニバルが越えたフランスからのルートと、ゲエテがたどった南独からチロルを経て、ブレンナー峠を越えるルートがある。岩倉使節団は、ゲエテと同じルートをミュンヘンから鉄道でたどり、フィレンツェに入った。

残念ながら天候に恵まれず、アルプスの絶景は雲や霧に遮られて堪能できなかったが、南独やチロルの整然たる畑や農家のたたずまいに比べ、アルプスを越えた途端、なんとなく風物が雑然とし、アジアの気楽さを感じたのは確かである。「実記」は「路傍ニハ蕪草アリ、市外ニハ塵芥アリ」と住民の怠惰性をいろいろ書き連ね、「通シテ勉勵ノ氣象ニ乏シク」



ブレンナー峠
岩倉使節と同じルートでイタリアへ

と評しているが、二度の大戦にもまれ、いまだEU内で懸命に自己の存在基盤を模索している現在のイタリア人たちは、秩序感覚こそさほど変わらなずとも、決して怠惰ではない。マクロの経済指標は芳しくなくとも、商人たちの機敏さ、威勢のよさ、交通ラッシュのなかの神風運転などを見ると、いままの日本より活気がある。

ハイデッカーの『存在と時間』にヒントを得た名著「風土―人間学的考察」の著者和田哲郎は、一九二七年にジェノバからローマに鉄道旅行した際、「陽光が強いのに、雑草がはびこらぬこと」に驚き、夏の湿度の少なさを、日本との風土の違いとして「イタリア寺院巡礼」で指摘している。こうした旅行での数々の「発見」が、のちの『風土』執筆の下地となった。

『実記』には「欧州ニ梅雨ナシ」と記され、米欧各国の樹木の成育が悪く、葉も浅緑であるのに、「此国ニ至リテ、始メテ濃緑ノ厚葉、之ヲ望メハ陰森タルヲミル」とある。近年、乾燥度の高い北アフリカや中央アジアに行く機会が多いので、ほどほどに湿度があつて、緑に恵まれたイタリアは、天国のようなもの。夏の湿気に悩まされる日本本土よりも、住みやすいは

◆フィレンツェの収穫

休日の時間制限で目玉のウツフイ美術館に寄れなかったのは残念だが、そこ以外のピユラーな作品は一通り観賞できた。だが私自身にとつて、サン・マルコ美術館などでアンジェリコやジョットの多数の作品に触れ得たのが収穫だった。ジョットには関心が薄かったせいもあつて、かえつて感動した。アッシジの大聖堂で見た聖フランチェスコが小鳥に説教するジョットの絵は、とくに印象に残る。柔らかな色彩で、深いやすらぎを与えてくれる。

◆ローマに想う

フォロ・ロマーノの廃墟で、ギボンがローマ帝国衰亡史の着想を得たひそみに倣おうとしたが、限られた日程と写真撮影に追われ、瞑想にふける余裕はなかった。それよりも、ヴァチカンのサン・ピエトロ大聖堂内部のとてつもない広大さと、すべてが白い大理石で構築されたエマヌエル二世記念堂のこけおどしに似た壮大さには、いままらながら唖然とせざるを得ない。

◆ナポリで再会

国際シンポジウム参加のデ・マイオさんがホテルで出てきてくれる。小休息のあと、たそがれのナポリのサンタルチア地区に出動し、有名なカフェで喫茶して、散策し、玉子城近くの浜のレストランでデ・マイオさん手配の夕食をとる。月あり、客船棧橋に3隻の豪華客船が満艦飾で係留され、ナポリの夜景の絶景とワインにすつかり酔う。



マイオさんと食事(右は若盛氏)

安んじて死ななや今宵月ナポリ
佳きひとあり新涼のレストラン

秋一日歴史を語る汽車の旅
血は熱きおみなおうなの秋の旅

年の小国分立と内乱に慣れきつたすべての住民に、国家、国民としての帰属意識を定着させ、ナシヨナリズムを世俗宗教化し、同時に国王自体をそれによって一種の神格化するこゝとであった。さらに、欧州全体に精神的支配力と物的利害関係を持つヴァチカンと、どう折り合っていくかであった。

一九一一年にはほぼ完成した前記の大記念堂は、古代ローマ帝国の時代、ヴァチカンの欧州支配時代に次ぐ第三のローマといわれた君主制最頂期の象徴だったのである。(一九四六年に共和制に移行したあと、無名戦士の墓となる)

『実記』はエマヌエル二世の謁見にも触れているが、「今王ノ英武ニヨリ、氣力ヲ振興セシモ、國中ノ民ハ、荒廢振ハサルノ氣象アリ」と手厳しく、「抑モ古ニ盛ナル民ハ、一衰ノ後、再振ニ難シト謂ヘシ」と突き放している。今日までのイタリアがどうであったかはともかく、むしろ現在の日本が「再振ニ難シ」状況になりつつあるのでは、と大いに気になる。

泉三郎氏 ニューヨーク市で講演 声を震らすほどの熱弁で好評を博す

ニューヨーク発 武田三郎(会員)



泉三郎氏がニューヨークに来訪され、当地の時事通信社主催のトップセミナー「特別講演会」で、「岩倉使節団の今日的意義」について熱弁をふるった。それは十一月八日(金)午後五時からカーネギーホールの斜向かいにある「日本クラブ」を会場とし、約六十名の聴衆を前に二時間半余にわたった。

このセミナーは主に当地の大手企業のトップをその会員とする月例のもので、永年の実績と質の高さを誇り、講演者は日米の高名な実業家、政治家、アカデミア、ジャーナリストが多く、聴衆及び講演者の双方から常に人気が高い。因みに九月度は来米中の小泉



「日本クラブ」で講演する泉三郎氏

首相、十月度はオリックスの宮内会長、十二月度はNHKの海老沢会長であった。

今回、主催者が「特別講演」としたのは、「岩倉使節団」のテーマを勘案したもので、通常のビジネスマンだけでなく、一般の非会員にも呼びかけ、日本近代化の原点にある本テーマについて、広く認識を高め興味を喚起する意図があったからである。それゆえ当日は、参加費十八ドル(非会員)にもかかわらず、一般の方や女性や学生の姿も少なからずみられた。

また、著名な会員としては、楠本定平氏(ミノルタ名誉会長、日系人协会会长)、田口俊明氏(北米トヨタ社長、福川正治氏(ニューヨーク首席総領事)、奥村準氏(ジェットロ

ニューヨーク所長、狩野務氏(ニューヨーク日本商工会議所専務理事)、上杉将司氏(米国ニチメン社長)らが見え、またコラムニストで翻訳家の佐藤祐彰氏も参加され、最後まで熱心に聴き入った。講演は、「岩倉使節団」派遣の時代背景、横浜出帆に到るまでの要約に始まり、次いでアメリカの旅をスライドで紹介し、さらには使節がこの旅で「何を見、何を感じた」かを豊富なエピソードを交えて解説し、最後にその今日的意義について触れる構成となった。

泉氏のスピーチは、自らその足跡を旅しての蘊蓄に拠るものか、リアルで臨場感がありかつユーモアに満ちていたもので、聴衆は熱心に聴き入った。とくに米国在住者には使節団の経験に共通するものがあり、とりわけインパクトが強かったと思われる。

最後に、泉氏は久米邦武の「米欧回覧実記」を評して、「表層の現象だけでなく、その背後にある原理・原則まで鋭く洞察し、西洋文明の本質にまで肉迫した格調の高い名文」とし、また現在の日本が大きな変わり目で方向を失っている時だけに、この岩倉使節団と「実記」の中に出る時代のヒントを見出せるのではないかと結んだ。

また、質疑応答では、ニューヨーク州のラトガース大学で本分野を専門的に研究している留学研修員より、
*フルベッキが作成したプリンフスケッチのオリジナル版はどこに保存されているのか?
*使節団員や随員の外国語の能力は十分だったのか?
の質問を皮切りに、他からも、

- * 使節団員の選考プロセスはどうであったか?
- * 外遊組と留守組の関係、相克は?
- * 外地での洋食続きに如何に対処できたのか?

など、次々と質問が出て、予定の時間を大幅にオーバーする盛況だった。泉氏はセミナー・質疑応答を通じ、よどみなく語り続け、その迫力ある熱弁ぶりに幾度も声が震れ水を飲む場面もあった。

なお、講演終了後、くじ引きの当選者に泉氏の著作本がギフトとして提供され、最後まで参加者は楽しんだ。また、この講演には当地のプレスへの参加もあり、「OGS NEWS」紙は、十一月二十二日付けで、この模様を写真入りで記載した。

さらに、泉氏は時事セミナーに先駆けて、十一月六日には「新橋会」で、七日には「如水サロン」で、いずれも十人前後の日本人トップビジネスマンやドクター、教授らと会食しており、極めてリラックした雰囲気の中で岩倉使節団について語り自由に意見を交換している。それらは時事セミナーとあいまって、ニューヨークでの「岩倉使節団の伝



道」に実を挙げることになったことを特記したい。これを契機として、今後当地でも「米欧回覧の会」に興味をもつ永住組の仲間を中心に、さらに小グループを集めることが出来ないか、その可能性を追求してみたい。幸いプリンストン大学のコルカット教授夫妻も既にわが会員であり、そのアドヴァイスも受けたいと願っている。来年はペリー来航百五十年周年記念を迎え、日米関係の歴史にも注目が集まる時でもあり、岩倉使節団への関心を高める環境は整いつつあると思う。この目的のために、泉氏および会員の方々の当地への来訪、また諸々の助言をいただければ幸いである。



国際交流部会からのお知らせ



五月「佐倉歴史ツアー」について

恒例となった国内の歴史ツアー、二〇〇三年は開国に因んだ場所として、千葉県・佐倉を訪れることになりました。

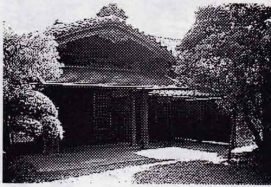
佐倉藩は江戸城の東方の守りとして重要な位置を占めて十一万石を領し、その藩主は歴代老中など幕府の要職を勤めています。特に幕末には堀田正睦という開明的な大名が出て、ペリー来航時の首席老中阿部伊勢守を継いで老中首座となり、開国交渉にあたりました。また、佐倉は「西の長崎、東の佐倉」といわれたくらい蘭学の中心地でしたが、それには

「蘭癖大名」といわれた堀田正睦の存在が大きい。佐藤泰然を招聘して洋学を導入し、それが後に佐倉順天堂となり多くの逸材を生むことになりました。

今回の歴史ツアーはその堀田正睦の邸、佐倉順天堂、鹿山文庫(蘭学)そして国立歴史民俗博物館を訪れようとするもので、現在五月十七日の土曜日を予定し、具体案を企画中です。

なお、岩倉使節団との関連でいえば、佐倉泰然の息子が林洞海の養子となった林董(ただす)であり、書記官として随行しています。また、八歳で使節団に同行し、アメリカに留学し

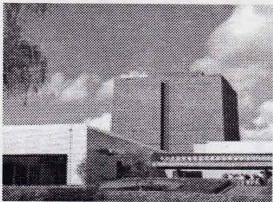
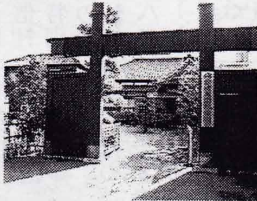
佐倉施設案内(佐倉市ホームページより)



旧堀田邸
堀田正睦の邸宅。佐倉藩最後の藩主佐倉東之助が住んでいた。

佐倉順天堂記念館

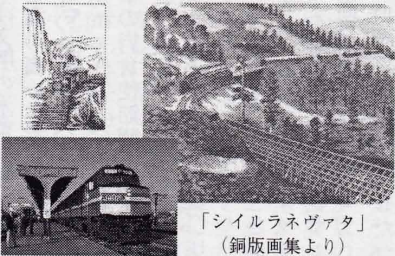
天保14年、佐倉藩主の堀田正睦が、蘭医の佐藤泰然を開いた蘭学塾。



国立歴史民俗博物館
佐倉城址の北側にあり、我が国の歴史民俗の宝庫。

た津田梅の父、仙も佐倉藩士、小島善右衛門の子です。また、国立歴史民俗博物館には「岩倉使節団」についての展示があります。

9月「アメリカ横断ツアー」について



「シルラネヴァタ」(銅版画集より)

ドイツ(〇〇年)、英国(〇一年)そしてイタリア(〇二年)に続く〇三年の秋の海外ツアーは、通年テーマの国アメリカです。

現在、サンフランシスコ、ソルトレークシティ、シカゴ、ワシントンまでの、ツアー計画が進行中である。この旅の特徴は大陸を鉄道で横断する点にあり、シエラネバダ山脈かロッキー山脈越えをしたいと思います。なお、ニューヨークも加えるかどうかは検討中です。

ツアーの概要は、確定しだい全体例会やニュースでお知らせいたします。楽しみにお待ちください。

実記を読む会の現況

連絡 クラウンインターチェンジ

Tel 03-5469-2090 Fax 03-5469-2093

info@crown-interchange.com



第五十六回例会報告

十月三日に開催された「読む会」は、藤原宣夫氏の研究発表「貿易についての一考」を会員全員が聴講した。同氏は元商社マンとしての経験を踏まえて、実記の読後感とご自分の体験を通じての考察を述べられた。内容は前回発表された室賀脩氏に刺激を受けたのか大変に充実したもので、まさに力作の名に値するものだった。くわえて、ご存知の「藤原節」で面白おかしく、かつ真面目に雄弁を振るわれ興味つきない発表があった。



藤原宣夫氏(中央)

第五十七回例会報告

十一月七日の「読む会」は、九月、十月と続いた研究発表から離れて実記の購読にもどり、

第一編第五巻「加利福尼(カルホルニヤ)州鉄道ノ記」百二十一頁に記されている「金鉱」についてと、第六巻「尼哇達(ネヴァタ)州及ヒ(ユタ)部ノ記」百三十一頁から始まる「インジャン」に関する記述を音読した。続いて水沢先生が、会員が音読した箇所を現代語に訳して朗読されるとともに、理解しにくい箇所について適切な解説をして下さった。ずばるな私には、久米邦武の難解な漢文調の表現に開口して適当に読み飛ばしていたが、水沢先生の現代語訳を聞かせていただいた。目からウロコ」の感を強くした。

第五十八回例会報告

十二月五日の「読む会」で西井易穂氏が発表された「実記の医療：近代医学への道と岩倉使節団」は、今年最後の「読む会」を飾るに相応しく内容の充実したものだった。西井氏は、製薬会社の研究所をリタイアされた一年前から「日本の近代医学への道」をライフワークとして本格的な研究を始めた。資料集は研究テーマに真正面から取り組まれた西井氏の意気込みと努力を雄弁に物語るものだった。西井氏ご自身が北は秋田から南は長崎に至るまで、日本の近代医学の足跡を訪ねて歩かれただけに、訪問先の踏査写真集を駆使してのレ

国際シンポジウム報告書

国際シンポジウムに関する報告書は既に最終の校正段階にあり、おそらく一月末ないし二月上旬には出版されるものと思われる。現在、京都の「思文閣出版」で作業が進行中であり、口絵つき、本文二段組、二百数十頁の本に仕上がる予定である。乞う、ご期待。なお、国際シンポジウムの

回覧実記英訳版(日本文献出版)

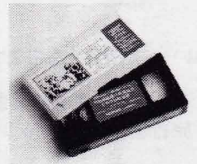
「第三十八回日本翻訳出版文化賞」受賞

四月例会(四月十三日)で斎藤純生氏がその出版の苦勞と経緯などを講演した、実記の完全英訳版「WAKURA EMBASSY」(日本文献出版)が、「第三十八回日本翻訳出版文化賞」を受賞した。これは、この一年で最も優れた翻訳とその出版の業績を表彰する日本翻訳家協会(理事長塚越敏、ユネスコ組織国際翻訳家連盟正会員)の権威ある賞である。

審査委員長・平野裕氏は「日本翻訳家協会」(二〇〇二年十一月十日号)の選評で、以下のように記している。

『(前略)視察記をまとめたのは久米邦武氏(太政官少書記官)で、岩波文庫(全五巻)に所収されているが、漢文調で地名、人名もカナ表記。翻訳作業は容易ではなかった。斎藤純生社長は長年、洋書輸入で身につけた経験を生かして、一九九〇年代の十年余、抜群の行動力、組織力で日米英の学者で翻訳チームを編成し、資金調達に奔走された。斎藤社長の固い信念、決意と努力なしには、この歴史的文書の翻訳出版は不可能だったこと、また日本文献の海外紹介の意義が高く評価された。』

国際シンポジウムビデオ



ビデオについては、前号のニュースでお知らせしたが、レセプションからフォーラムまで全四日間のダイジェストが三十七分に要領よく編集されている。

頒布価格は1500円、送料300円です。購入希望者は事務局までご連絡ください。

二〇〇三年全体例会予定

十一月二十八日(水)、国際文化会館セミナールームで幹事会が行われ、二〇〇三年の全体例会の日程が決まりました。早速、会場の手配(予約)が試みられ、左記のように決めましたのでお知らせします。

- ◆ 四月全体例会
四月十九日(土)
日本プレスセンター
- ◆ 七月全体例会
七月十二日(土)
学術総合センター

メディア部会へのお誘い

ニュースとホームページの編集・制作は、パソコンやインターネットなどを駆使したメディア部会会員による手作業です。しかし、当会の活動の範囲は拡大し、機器や技術の革新だけでは対応できない課題を抱えています。

即ち、海外の人々が閲覧できる英語版ホームページの編集(ダイジェストの翻訳)も、また、足立会員をサポートする、スライドなどの映像をCDなど手軽なメディアに構成する企画・編集などです。

関心のある方は、会合にお誘いますので、中山会員まで連絡して下さい。

クチャーは甚だ説得力があった。

西井氏は、岩倉使節団に随行した長与専斎が、明治七年「医制七六条」を制定し、これが日本の近代医学のスタートとなったという事実を紹介された。

これは「医学医療」が実記の本文には余り記されていないものの、実際には岩倉使節団の派遣によって日本の近代医学への道が開かれたと言っても過言ではなさそうである。「実記ファン」である我々にとって嬉しいご説明だった。

また西井氏は、医療の技術的な側面にとどまらず、倫理面にも言及され、緒方洪庵が遺した「医の世に生活するは人の為のみ、おのれがためにあらず(中略)名利を顧みず、唯おのれをすてて人を救わんことを希ふべし:」の一文を紹介された。このように崇高な思想が、華岡青洲はじめ当時の医療関係者に共有されていたということ、是非多くの人に知っていただきたい。

(文) 正木会員
(写真) 岩崎会員



西井易徳氏



関西支部の現況

連絡 山崎 岳麿

Tel&Fax 06-6853-3137

takechan@tcct.zaq.ne.jp

例会報告

十一月十九日、参加者十五名。テーマがオーストリアということ、会の前に「会議は踊る」のビデオを少し見る。

「米欧回覧実記」のオーストリアの総説をリアの総説を読む。確かに衰勢はあるが、厳しい批判が多い。この国の貴族の贅沢ぶりや、果ては観兵式、軍隊まで見せるためのものになって兵舎や軍服を「嘉尚するに足らず」等と批評している。万国博覧会の見学記は総論とオーストリアと日本の展示の部分しか読めなかったが、歴代の万博日本館を紹介する本の版面により記載の通りであることを確認。鮑屑を杉の香りがいいと評判になったのは面白い。

最後にハンガリーの部分を読む。ハンガリー人は匈奴の遺裔、すなわち蒙古人ということ、で、実記に書かれた通り、ゲルマン人とは全く違う。ここで日本人や日本語の起源の話となり、南インドタミール語にまで及ぶ皆さんの博識振りに感心して終った。

(文) 山崎会員

「米欧回覧の会」ご案内

趣旨 この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この大いなる旅と「実記」はまさに「温故知新」の宝庫と言えます。
この素材を媒体にして歴史をふりかえり現代の直面する諸問題についても自由に語りあおうという会です。

会員 上の趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

例会 年に4回くらい全体例会をもちます。

分科会 テーマ別にグループ活動をします。映像サロン・勉強会・旅行会・研究会・シンポジウムなど。

機関紙 年に4回程度機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

幹事 会員の中から、代表1名、幹事十数名を選び、運営を担当します。

会費 年会費5,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・分科会・講演会などについては、その都度の会費とします。

事務局 当面「イズミ・オフィス」に置きます。
〒192-0063 八王子市元横山町1-14-16
E-mail: info@iwakura-mission.gr.jp
TEL: 0426-46-3310
FAX: 0426-45-8700

入会申込

氏名・連絡先(自宅或いは勤務先の住所)・TEL・FAX)現職&キャリアを事務局までFAXまたは郵便でお送りください。なお年会費は郵便振込が便利です。

00180-2-580729 米欧回覧の会

<催し案内>

2003年1月~3月の予定です

☆新年懇親例会

日時: 2003年 1月20日 (月)
18:30~21:00 (受付18:00)
場所: 日本外国特派員協会 (外国人記者クラブ)
有楽町電気ビル20階 (有楽町駅前)
電話 03-3211-8171
テーマ: 「アメリカ」
会費: 7000円 (ご同伴5000円)

☆実記を読む会

日時: 1月9日 (木) ユタ部 (ソルトレーク)
2月6日 (木) 第1編車窓からの眺め等
場所: いずれも
南青山クラウンインターチェンジ内サロン
電話 03-5469-2090

☆現未来部会

日時: 2月5日 (水) 18:30~21:00
場所: 国際文化会館 セミナールーム
テーマ: 日本経済の再生策をどうするか
~デフレ対策優先か、構造改革重視か~
会費: 1000円
(幹事 塚本弘、小田仁彦)

☆歴史部会

日時: 3月5日 (水) 18:30~21:00
報告者: 深津眞澄氏「対支21ヶ条と加藤高明」
会費: 1000円

☆関西支部例会

日時: 2月14日 (金)
場所: 大阪凌霜クラブ会議室
問い合わせは、
山崎岳磨 (Tel&Fax 06-6853-3137)



.....ホームページのご案内.....

- ◇米欧回覧ニュース第1号からのバックナンバー
- ◇会の催し・部会活動の速報
- ◇<群像>岩倉使節団とその周辺(パネル30枚)
- ◇インターネットサロン(会議室) など

*皆様のご意見をお聞かせ下さい
(ホームページ編集に関心のある方歓迎します)

<http://www.iwakura-mission.jp>

編集後記

◇読む会は「実記」を一巡しても留まる所を知らず、もうすぐ六十回を数え、一つの通過点に到達します。一方で、年間の恒例行事となった国内外のツアーは、毎回盛況で、全体例会ではビックスの著作に逸早く反応して天皇制を熱く論じています。

そして、地域を越えた会員の活動は、関西支部に加えてニューヨーク支部結成も「正夢」になりそうな勢いを感じます。

◇このように、多くの会員の参加を促す契機となったのは、なんとと言っても二〇〇一年・国際シンポジウムの成功です。

国際シンポジウムのビデオや報告書が当会のメディアに加わると、会員ばかりでなく広範な人々との交流という新しい段階に入ったことを実感するはずで

◇「実記」をめぐる環境は、関係者の長年の地道な作業が実を結び、英訳版に続きドイツ語版の出版と、まさに同時多発的に噴出しています。世界が大きく動く時に、「実記」が米欧亜と日本共通のテキストとなることを願います。(N)